
雪月花

神田 ジュン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪月花

【Nコード】

N5336C

【作者名】

神田 ジュン

【あらすじ】

ある二人の恋人たちの、ラブストーリー。お互い、すれ違いながらも、本当に人を愛することとは？という答えを導き出す。男と女、それぞれの視点から物語を描いています。

プロローグ（前書き）

この物語は【彼】と【彼女】で書いています。あえて名前は付けませんでした。そして、それぞれの視点から物語は構成されています。彼の視点・彼女の視点。一見、同じ場面でも、男と女では考え方が違います。第1部は序章にすぎないので、第2部まで、我慢して読んでほしいですw

ブローグ

この海はあのころとなんら変わらず、僕を迎えてくれていた。

人工の砂浜、造られた景色。

すぐそこには国道が走っていて、

海風が強いこの海にはまばらにしか人気は無く、

どこからか流れ着いただろう、ジュースのペットボトルや空き缶、
お菓子の袋、誰かが捨てたのであろう、朽ち果てた自転車が横たわ
っている。

そして夏の思い出の残骸の花火などが所々にあり、お世辞にも綺麗
な海とは呼べなかった。

僕はまた、この場所に立っている。

約束の場所。

思い出の場所。

別れの場所。

あれからなんとなく僕はこの場所をさけるようになった。

ビーチの入り口にあるひとつの街灯が僕の車をやさしい光で包み込んでいた。

空をみあげると、漆黒の空に体が吸い込まれそうな感じがした。

淡く輝く下弦の月が周りの星たちと、滑らかに語り合っているような、そんな気がした。

君はここから見る景色が好きだったね。

沖のほうは赤い光がチカチカと規則的に点滅を繰り返していた。

手前には恋人達が幸せそうに語り合う赤い橋や、あのころは確かもうと白かった、古びたテトラポットがある。

ビーチはゴミで汚れているけれど、それがかえってこの世界をリア

ルに見せていた。

周りを見渡せば今日はクリスマスイブだということもあり、カップルが何組か座っている。

何をしているのかは暗くて良くは見えない。

あの日もクリスマスイブだったね。

それもホワイトクリスマスになったんだ、彼女のいうとおり。

あこのころの君が、今の僕をみたらなんて思うのだろう。

教えておくれ、この僕に。

君なら、なんていつてくれるんだい？

プロローグ（後書き）

もっと、表現力があれば・・・と、自分の力の無さを感じました。
ストーリー的には好きなんでw
ホントは、バットエンディングでしたが、ハッピーエンドにしましたw

第1部 1章 笑顔の横で

「もう、おわりにしよっか」

彼女は僕の腕の中で優しい声でそういった。

彼女に言わせてしまった言葉。

深く、そして重い言葉。

「・・・そうか、わかった。」

そう言うのが精一杯だった。

「・・・あ、雪・・・」

「・・・ほんとだ・・・」

彼女の予言どおり、この日はホワイトクリスマスになった。

天使の羽の様に舞い落ちる雪の白さと、どこまでも続いている海が僕達を包んでいるような気がした。

彼女の冷たくなった体と、彼女に対するありがとうという気持ちを抱きながら、いつまでもこの時間が続くことを祈り、彼女の温もりを感じていた。その温もりは僕に彼女と過ごした日々はとても大切な時間だったと気付かせてくれていた。

この腕を放せばもう感じられない温もり。そう思うと僕は涙が止まらなかった・・・。

彼女と過ごしたやさしい時間が思い出となって涙と一緒に溢れ出てきた・・・。

（数ヶ月前）

「わっ」

彼女と約束していたデートの待ち合わせ場所で、タバコをふかしな

がら待っていた僕に

突然うしろから彼女が飛びついて僕を脅かした。

「ごめ〜ん。おまたせ〜」

「びっくりすんだろ〜？ ったく、それよりも、おい遅刻だぞ？」

その顔はわるびれた様子もなく、いたずらっぽい笑顔をふりまいていた。

「ごめんねえ、ほんと、ごめん。怒ってるの？ でも、ほら、女の子ってお化粧とか時間がかっちゃうからさあ」

「うん、そっかそうだな・・・って、だからって遅刻してもいいってわけじゃないだろ？ だいたい遅刻したらなんてゆーんだっけ？」

「はい、ごめんなさい・・・もう、そんなにおこないでよ〜。ね？ すきだよ〜すきっ」

そういつて彼女は僕の腕をとり、背伸びをし15cmある身長差を縮め頬にキスをしてきた。

「おい、もう、わかったから、やめろって公衆の面前で、はずかしいだろ〜。そんなんじゃ、ごまかされないぞ。」

そうは言いながらも、僕は少しうれしかった。

ここだけだとバカップルばいけれど、僕はあんまり馴れ合いは好きではないし、ベタベタするのも苦手だ。付き合って1年ちよつとのどこにでもいる普通のカップルだ。

よく彼女の買い物につきあっては、買い物が長いと、愚痴をたれていたし、たまにゲームセンターにいくと、彼女のために2千円も使い、さほどかわいくもない、ぬいぐるみをとってあげたりもした。

テレビで話題の映画を観に街の映画館にいったら決まって、ポップコーンとコーラを1つずつ買い、仲良く2人で分けながら映画に夢中になった。

観終わると近くのカフェでお互いの感想を言い合い、たまにお互いの解釈の違いから口論になったりもしたが、最後はビデオがでたらまた見ようね、ということであとまっていた。

そして、僕の家には彼女をいつもの様に連れてきては体を重ね愛を確かめ合ったりした。別れ際には背を向いている僕に決まって彼女は細い腕をまわし、体をよせてきた。

僕は背中に感じる彼女の鼓動にやすらぎを感じ、愛しくなり向き直って彼女の唇にやさしくキスをした。

キスをするたびにうまくなっていく彼女に、僕はなぜだか切なくなつた。

電話は毎日してたし、メールも用も無いのに毎日10通はやり取りをしていた。

そのメールで僕は人と繋がっているという実感を得ていた

2章 包み込むように

「たのしみだね。」

ショッピングモールで買い物満喫した彼女は、帰りに海で流れ星を見てから帰ろうと、僕の手を引っ張りながらそう言った。

「なにがさ？」

「もう！わかんないの？もうすぐクリスマスイブじゃん！あさつてだよ？初めて一緒に過ごすイブだよ？去年は私のせいで会えなかったし、今年こそはね。たのしみ〜」

「ああ、そうだなあ。」

「どうするどうする？なにしようか？なにしよう〜」

「ん〜、なんでもいいんじゃない？」

「もう〜。また適当な返事してえ。でも、たのしみだなあ、はやくクリスマスにならないかなあ」

「そうだな〜。たのしみだ。」

僕は買い物に疲れて、適当に返事をした。

どうして女の買い物はこうも長いのだろう。おかげでクタクタだ。

「ちよつと〜、ほんとにそう思ってるの？」

彼女はちよつと不機嫌そうな顔をして、僕の二の腕をつねった。僕はちよつと彼女が怒った顔が好きで、時折わざと彼女が怒るような事を言ったりした。

「いてて、いてえて！マジで楽しみにしてるって。」

「プレゼントも用意してあるし。」

「・・・ほんと？・・・うれしい・・・」

本当にうれしそうな顔をしていた。

女心はわからないものだ。さっきまで怒っていたのに、またすぐ、機嫌がよくなったり、よくわからない生き物だ。

「ねえ！イブの日は、またここにこようよ！この海を見にね！ねえ、いいでしょ？」

決してお世辞にも豊富な胸とはいえないその胸を、僕の腕に押し付けながら甘えた声で彼女はそう言った。

「別にいいけど、海が見たいなら他のきれいな所、連れてってやるよ」

「やだ！この海がいいの。この海が好きなの。うまくいえないけど、この海は・・・やつぱり、秘密！」

「なんだよ？気になるだろ？教えるよ」

「ダメー、内緒ですう」

彼女はいたずらっぽく照れた表情をして笑った。

「なんだよ、ちえ、まあいいや」

いつものように僕は流した返事をした。

僕の左手には彼女が一目惚れして買った黒のコートとマフラーが入った買い物袋。右の腕は彼女の握り締める手で塞がっていた。

僕は背中が痒いのをがまんして、腕を組んで人がまばらな人工の砂浜をゆっくり歩いた。

3章 恋の始まり

彼女と初めて出会ったのは、一年半ぐらいまえだった。

うつとらしい梅雨が明け、7年もの歳月を土の中で過ごした鬱憤を晴らすかのように、蝉が五月蠅く鳴いていた夏の始まりの頃だった。アルバイトは別になにがやりたいとかではなく、求人広告にたまたま目がとまったやつだった。普通の人と同じことがしてみたかっただけだった。

初めてやるバイトで右も左もわからなかった僕に、親切に教えてくれたのが彼女だった。1つ年下の彼女は細身で、背中まである長い亜麻色の髪がとても似合っていて、笑うとエクボができるのが印象的だった。

お互い恋人もいなかったし、なにかと肌が合っていたので、恋人関係になるのには夏休み期間中だけで十分だった。

僕は出会いを求めてアルバイトを始めたわけではないし、彼女のことも初めはまったく意識していなかった。

それが、ある出来事がきっかけで気になる存在になっていった。

僕はいままで「彼女」がいなかったわけではない。

いままで何人かの女性と付き合ってきた。だが、みんな上辺だけの付き合いだった。別にいなければいけないで困ることはなかったし、適当に付き合っていたから、いなくなっても何も感じなかった。

でも、いままでの「彼女」とは違う何かを彼女はもっていた。

彼女となら・・・そんな気がした。そんな気にさせられた。

だからそんな彼女に自分を見透かされているような言葉をいわれてショックだったのかもしれない。

4章 真実は彼女の流した涙の中に。

「まだかなあ、流れ星」

彼女はそういいながら僕の手をさらに強く握った。

僕はこんな都会の真中にある海で流れ星なんか見つけれられるわけが無いと思いながら、彼女に無言でつきあった。

今年の冬は暖冬なのか、昼間は夏の様な陽気だったが夜の海風が着実に冬が近づいていることを知らせていた。

僕は彼女の体温を感じながらちよつと薄着で来てしまったことを少し後悔した。

首が疲れるねと、笑いながら言った彼女はおもむろに、去年の夏、一緒に買いに行ったブランド物のバックから魔法瓶を取出し、あたかいココアをコップに注いだ。

暖かい飲みものを用意してあるなんて、気が利くってゆーのか、なんてゆーのか・・・なにをかんがえているのか。

僕は聞こうかと思ったが、ココアから立ち上る湯気をみているうちに、そんな疑問などどうでもよくなった。

いきなり暖かいものを体内にとりいれて体がビクリしていた僕に、彼女は昼間買ったばかりの黒のマフラーを袋からとりだし、やさしく僕の首に巻きつけた。

「ありがとう」

僕は聞こえないぐらい小さな声で言った。

すると彼女はいつもの微笑で、かさついた僕の唇にキスをした。

そのやさしいキスはココアの味がした。

その時間がたまらなく切なく、そしてはかなく感じた。

「あ！流れ星！」

彼女の横顔に見とれていた僕はその言葉に反応してすぐ空を見上げたが、もう流れ星はみえなかった。

「みたみた？」

彼女は僕が見逃したのを承知の上で、いたずらっぽく聞いてきた。

「私はすっかりみたもんねえ。願い事もバッチリ！」

「なにをお願いしたんだ？」

「へへへ、ひ・み・つ！人に言っちゃったらご利益なくなっちゃうもん。」

彼女は甘えた声で、目を輝かせて言った。

「ふん、じゃあ、きかねーよ」

僕はわざとちよつと不機嫌そうな声で彼女の反応を見ることにした。

彼女は僕の期待通りにすぐさま、あやまってきて、僕の腕を強く抱きしめた。

そして少し淋しい目で海を見ていたかと思うと、その目は焦点があつてないようだった。

「なあ、どうした？おいつてば。」

僕は気になって彼女に声をかけた。

「おい、どうした？ぼーとしちゃって」

「ん・なんでもない。海をみてただけだよ。」

「ふーん。ならいいけどさ。」

「あ！あさつてさあ、雪、降らないかなあ。イブの日に。イブの日に雪ってロマンチックだね、なんか絶対、雪降るような気がする。」

彼女は突然、思いついたかのように、またクリスマスの話をした。した。

「降らないって。天気予報では晴れだっていつてたぞ。それに東京ではホワイトクリスマスなんてまずありえないよ。あんなのドラマの中だけさ。たしかここ100年間で1回しかなかったはずだよ。降ったら奇跡だって。」

「そうだとしても、降るよ、絶対ね。」

そついった彼女の笑顔が印象的だった。

「ねえ、今年のクリスマスだけでなく、この先も、来年も再来年もずーっと、ずーっとクリスマスは一緒にここに来ようね！約束ね！」

「えー、やだよ、めんどくせーなあ。だいたい先のことなんかわかんねーだろ？そんな先の約束したって意味無いよ。」

わざと突き放すように言った僕はココアを一気に飲み干し、飲み干したコップを彼女に渡そうと、ふと彼女の顔を見ると、彼女は大粒の涙を流していた。

その顔に精気はなく目は焦点が合っていなかった。

まるで幽霊でも見たかのように青ざめたその顔は最後まで僕に見せたこともない顔だった。

僕は突然の出来事に戸惑ってしまった。

なぜ泣いているのか？

さっきの返事のせいかな？

どうした？と声をかけても彼女は意識がないのかただただうわごとのように、なんでなんで？と繰り返し言い、泣いているだけだった。

そこまで泣くようなことだったか？僕はただただ謝ることしかでき

なかった。

そんな僕にいきなり彼女は抱きついてきた。

今までにないぐらい力強く。

その小さな手をいっばいに広げながら、僕の胸の中で子供みたいに泣いていた。

5章 ココロの扉

「さつきはごめんね」

僕らはいつも映画みたあとにきているカフェにきていた。

コーヒーとレモンティーをオーダーした僕らは、しばらく沈黙したと、やっと落ち着いたのか彼女から話し掛けてきた。

「あ、ああ、．．なんだったんだよ、なんで突然なきだしたんだ？　なんか気に障った？」

「ごめんね、さつきはちょっと感情が高ぶっちゃって、ほんとごめん、気にしないで。ね？」

「気になるよ。ちゃんとわけを言ってよ。」

「ちょっとね。なんでもないの。もう大丈夫だから。」

「なんだよ．．」

僕は力なく答えた。

「愛してる。」

「え？　な、なんだよ、突然。」

「うん、別に。だた、言いたくつて。愛してるよ。」

「わ、わかったよ。まったく。突然泣き出したりわけわかんねえなあ」

僕は、彼女の言葉に内心どこかほつとした。

涙のわけがわからなかったし、僕のせいかと思い、嫌われたんじゃないかと思つたが、どうやら違ふようだ。

「・・・ねえ、将来のこと、・・・どうかんがえてるの？」

「え？」

「・・・あなたは、いつもどこか悲しい目をしているの。・・・なんで・・・人を理解しようとしなの？今はいいかもしれないけど、この先そんなんじゃない・・・ダメだよ・・・。いろんな世界をしらなきゃ。そして、しっかり目標も作つて、その目標のためにしっかりと自分の足であるいていかなきゃ。・・・ね？」

「・・・なんだよ、いきなり。」

やさしい声でそう彼女が言ったのは僕が彼女との話し合いに一区切りがつきコーヒーをおかわりした後のことだった。

僕は突然の彼女の言葉に戸惑い、ごまかす様に、窓の外の街灯がいちよう並木のさびしそうな姿を浮き彫りにしてるのを見ながら、クシャクシャになったソフトケースから煙草を取出し、彼女からもら

ったジッポで火をつけた。

まるで彼女に心の中をのぞかれているような気持ちになり、そう答えるのが精一杯だった。

今まで必死で隠してきた本当の自分。

本当の僕は弱虫だ。

自分が傷つきたくないから他人と干渉したくない。

自分を守る為に嘘もつく。

相手にどう思われているか不安で、恐怖にかられる。

人の目が気になる。

僕の事どう思ってる？

僕を嫌ってる？

僕を見捨てる？

・・・。

知らず知らず僕はひねくれた人間になってしまっていた。

楽なほうにばかり流れていていた。

人生なんて生まれたときから決まっっていて、だれもその運命には逆
らえないんだ。

だったら、その目の前にひいてあるレールを疑うことなく進んだほ
うが利口だと思うようになった。

どうせいつかは必ず死ぬんだし。そして死ぬときは必ず一人だ。

そう考え、他人との干渉を極力避けてきた。

その例外が彼女だった。

彼女の存在に自分でもわからないがどこか惹かれていった。

そして彼女といれるなら、このつまらない人生も悪くないかなつと、
思うようになっていた。

その彼女に僕の人生を否定された感じがして僕はショックだったの
かもしれない。

「・・・どういうことだよ。」

言葉が頭を通らず、一気に喉から感情とともにでてしまった。

そっからはもうとまらなかった。

いろいろな考えが浮かんでは消え、いつもの僕ではなかった。

「なにがいたんだよ。なに？なんなんだ？お前は哀れnderの？」

「ち、ちがうよ、私はただ・・・そうじゃなくて、あなたはいつも、人と距離を置いてきたでしょ？言いたいことも言わないで・・・だからせめて私には言ってほしいの、なにを考えて、何を思っているのか、素直に言ってほしいの。」

「お前に言われたくねーよ。だいたいおまえになにがわかるんだ？」

僕は、自分の中のわだかまりを彼女にぶつけてしまった。

彼女はなにも悪くないのに。

自分の感情をがむしゃらに吐き出し、言うだけ言って彼女の前から消えた。

そしてクリスマスイヴを迎えた。

世間では、突然の異常気象により東京が40年ぶりのホワイトクリスマスになるかもと騒いでいた。

6章 聖なる夜（前書き）

6章 聖なる夜

「・・・もしもし、連絡ください。会って話したいから・・・待ってるから、ずっと・・・」

電話が嫌いな彼女からのメッセージを聞き終え、僕はしばらくじっと携帯電話を見つめていた。

どうしてこんな風になってしまったのだろう。

別に理由なんてなかった。

彼女のことを嫌いになったわけでもない。

ただ、なんとなく、このままでいいのだろうか、思ってしまったからだろう。

彼女との関係の話ではなく、僕自身の生き方に・・・。

僕は何もかもが面倒になってしまっていた。

昔のように。

理想と現実。

夢と現実。

嫌になる。

逃げたくなる。

窓からのぞく灰色の空を眺めながら僕は深くため息をついた。

朝起きたときはいい天気だったが、夕方には今にも泣き出しそうな空をしていた。

その重い空が押し掛かって来るようで僕はたまらずベッドに倒れこんだ。

きつと彼女の予想は当たるだろう。

天気予報もそういつていた。

今はまったく使っていない机の上に、無造作に置いてある写真立ての無邪気な彼女の笑顔を横目で見ながら、僕はゆっくりと瞼を閉じた。

『問題は自分か・・・』

彼女と会って、ちゃんと話をしなければ・・・そう思い、僕は彼女の携帯電話を鳴らした。

街はどこもかしこも赤と緑のクリスマスカラーに彩られ、イルミネーションが輝いていた。

クリスマスソングがあちらこちらで流れ、不景気な世の中と言われているのが嘘の様に街は買い物客で活気づいていた。

目にとまる人たちはカップルばかりで、皆どこかに向かって歩いている姿が幸せそうに見えた。

そんな中、1人黒いマフターと黒いコートをもった女性が携帯電話を見つめていた。

その姿がどこか切なく、悲しそうに見え、そして愛しく見えた。

「約束の時間より早くついちゃった」

彼女は人ごみの中に僕を見つけると、携帯電話をバックにしまい早速でやってきて、さっきまでの悲しそうな顔が嘘のように無邪気に笑って言った。

クリスマスだというのにその海は人が少なく、どこかさびしそうだっ

僕らはあの時、一緒に流れ星を探した場所と同じところに静かに腰をおろした。

どれほど時が経ったのだろうか、静けさがあたりを包みこんでいた。

そんななか彼女が口を開いた。

「・・・んと・あ・、元気だった？」

長い沈黙を破り、彼女は僕を目を見ずに震えた声で言った。

「うん、まあまあかな・・・」

相変わらず僕は適当な返事をした。

正確に言えば彼女に僕の言葉をどう伝えたらよいかそのことを考え頭がいっぱいで、上の空だった。

「そうだ！またココア持ってきたんだ、一緒に飲もうよ・・・」

彼女はそういつてバックから魔法瓶をとりだし、僕にココアを注いでくれた。

僕にコップを差し出したその手が震えていた。

そんな彼女を横目でみると、静かに泣いていた。

それに気づいた彼女は照れ隠しの様に笑って、

「なに泣いてるんだろね、私・・・」とかすれた声でいった。

その涙は、初めて彼女が僕にみせた涙を思いださせてくれた。

そう恋のきっかけは彼女がみせた涙だった

7章 涙

その日はとてもよく晴れた暑い日で、空が透き通っていた。

バイトがなければ海にでも出かけたい気分だった。

煙草の煙がバイト先の休憩室を白くしていた。

そんな休憩室にはいると、彼女は泣いていた。

僕は驚いた。しかし、僕はその涙をうつくしいと思ってしまった。

「ねえ、何で泣いているの？」

いつも人前では元気で無邪気な笑顔を振り撒いている彼女の涙を目のあたりにして、僕は唐突に質問してしまった。

僕はバイトにも慣れ、周りにも少しだが気を使わずにいれるようになったが、まだ彼女とは仕事の話しかしたことがなく、プライベートの話はお互い一切、話はしなかった。

話す必要はないと思っていたし、彼女のプライベートは知らなくても良いと思っていたからだ。

そんな、仕事だけの関係だった。

そんな関係だった彼女に突然、質問をしてしまった。

「・・・今日も暑いね、仕事はだりーし、こんな日は海にでもいっ

「泳ぎたいよね」

僕は彼女に聞いてはいけないことを聞いてしまった気がして、強引に話を変えた。

「そうだね、海、いきたいよね、海・・・みたいなあ・・・」

彼女は遠くを見るようにして、僕にそう返事をした。

もう、彼女は涙をながしていなかったが、休憩室の小さな窓から入ってくる夏の日差しで、彼女が流した涙のあとがキラキラと輝いていた。

僕はそんな彼女の顔に見とれてしまっていた。

「今日、このあと時間ある？」

「え？」

彼女は僕の突然の言葉に驚いたようだ。

僕自身もなんでこんなことを言ってしまったのか驚いていた。

僕は彼女がなんで泣いていたかわからなかったが、放ってはいけな
い気がして、気づいたら彼女を誘っていた。断られると思った。

というか、誘ったのを後悔し、断ってくれと願った。

だが以外にも彼女は少し考えてからゆっくりと首を縦にうなづき、
涙の跡を拭いた。

そのときには彼女はいつも僕が知っている笑顔が良く似合う、元気な彼女に戻っていた。

8章 別れ、そして・・

僕は忘れてしまっていた。

あの時彼女の涙をみて、海を見に行こうと誘い、はじめて二人で出かけた海が、今いるこの海だったということを。

今、はつきりと思い出した。

彼女のしずかにながれる涙をもう一度、目のあたりにして。

そして、それと同時に彼女の涙は彼女への僕の気持ちをし、はつきりときづかせてくれた。

僕は彼女が好きだ。

この世界で誰よりも大切に、そして愛しい存在。

僕の弱い部分を彼女は何も言わず、やさしく支え続けてくれている。

誰よりもかけがえのない存在。

ふと、自己嫌悪に襲われた。

僕はいつたい今まで、彼女の為に何をしてあげただろうか。

いつもいつも、自分勝手な行動をしてきて、彼女にはいろいろ嫌な

思いをさせてしまっただろう。

最低だ。

そんな僕に何一つ文句を言わず、ずっとそばにいてくれた彼女。

そんな彼女をつきはなし、さびしい思いをさせてしまった。

彼女に謝らなければ。

今度は僕が彼女の為にできることをしてあげたい。

「あなたにとって私ってなんなのかな・・・。」

彼女は涙を拭きながら震えた声でそういった。

僕は彼女に伝えなければいけないこと、言いたい事、話したいことがいっぱいあったが、その彼女の涙が僕の心の奥を締め付けている気がして言葉にならなかった。

そして気が付いたら彼女のことを力いっぱい抱きしめていた。

「もう、おわりにしようか・・・。」

彼女は僕の腕の中で優しい声でそういった。

彼女に言わせてしまった言葉。

深く、そして重い言葉。

僕は彼女にかける言葉を必死に探した。

彼女の為に出来ることを必死に考えた。

彼女の為に僕が出来ること……。

「……そうか、わかった。」

そう言うのが精一杯だった。

人によってはそれは間違っていると、反感を食うかもしれないが、僕は彼女の性格を誰よりも理解していると自負している上で、彼女の幸せを願うならばと、別れを決意した。

僕と一緒にでは彼女は幸せになれない。

僕は彼女にはふさわしくない。

そう心の中で何回も繰り返し叫びつづけた。

来年のクリスマスも一緒にこの海を……という彼女との約束はかなえることはできそうもない。

「……あ、雪……。」

「……ほんとだ……。」

彼女の予言どおり、この日はホワイトクリスマスになった。

天使の羽の様に舞い落ちる雪の白さと、どこまでも続いている海が二人を包んでいるような気がした。

彼女の冷たくなった体と、彼女に対するありがとうという気持ちを抱きながら、いつまでもこの時間が続くことを祈り、彼女の温もりを感じていた。

僕は涙が止まらなかった・・・。

第2部 1章 ホワイトクリスマス

（ちよ、ちよつとまてよ！）

雪の降る夜の街の一角の交差点。

横断歩道をわたりきった女性に、息をきらして走ってきた男性がそう呼び止めた。

赤信号が二人をさえぎる。

その声に振り返る女性。

顔は見えない。

そこで古いビデオのようにノイズがはしるからだ。

なにやら道路をはさんで会話してる。

ノイズがはいって聞き取れない。

信号がなかなか変わらない。

去ろうとする女性。

信号無視してわたる男性。

と、そのとき、猛スピードで突っ込んでくる車。

こだまするブレーキ音。

ドンっという鈍い音とともに叫ぶ女性。

地面に倒れてる男性。

泣き叫ぶ女性。

そこでいつも夢から覚める。

そう、これは私が小さいときから何度も繰り返してきた夢だ。

毎回同じ夢を見る。

一体誰なんだろう。

あのあとどうなるんだろう。

多分これはまだみぬ未来の出来事だということは私にはわかっていた。

私の未来なのか？

一体いつの？

この夢を見た日は大抵悪いことが起きる。

昔からそうだった。

だけど、今日だけはなにも起こらないで欲しい。

だって今日はクリスマスなのだから。

7回目のコールで音声が悲しく流れた。

「ただいま電話にすることができません。御用の方はメッセージをどうぞ」

私は彼に何度電話しただろうか。

何度、メッセージを残しただろうか。

ここ2週間電話もメールも返事がない。

でも、悪いのは私だから。

あの話をすれば、彼は拒絶するのはわかっていた。

だけど、話さずにはいらなかった。

彼のために、そして私のためにも。

私は彼が好きだから。

異常気象により東京では40年ぶりのホワイトクリスマスになるでしょうと、テレビのお天気お姉さんがガヤガヤ騒いでいた。

そんなの私にはあの日からわかっていた。

彼は、あの日交わした私との約束を覚えているのだろうか？

そうおもいながらも、私はすぐにでもでかけられるよう準備だけはしていた。

2章 待ち合わせ

「ったく、あいつはまた遅刻かよ・・・」

彼が小声で独り言をいつているのを私は、彼が寄りかかってまっている柱の後ろで聞いていた。

私は彼がすねた顔をみるのが好きだった。

その顔や、彼のリアクションを見るために、私は彼よりも必ず早く来ていた。

そして、待ち合わせ場所からちょっと離れたところで彼が来るのを待っているのだ。

私のために待っていてくれる、そうおもつと、彼には悪いけど、うれしくなるのだ。

「わっ」

彼がタバコをふかしたのを見ると、そろそろ待つてられる限界だなと思い、彼の背中に抱きついた。

「ごめん。おまたせ～」

「びつくりさせんなよー。ったく、おい遅刻だぞ?」

彼はちよつと不機嫌そうにそういった。

私は彼のすねた顔をみて、愛しくなった。

「ごめんねえ、ほんと、ごめん。おこってるの？でも、ほら、女の子ってお化粧とか時間がかっちゃうからさあ」

「うん、そっかそうだな・・って、だからって遅刻してもいいってわけじゃないだろ？だいたい遅刻したらなんてゆるんだっけ？」

「はい、ごめんなさい・・もう、そんなにおこないですよ。ね？すきだよ〜すきっ」

そういつて私は彼の腕をとり、背伸びをし15cmある身長差を締め頼にキスをしてきた。

そうすると彼はすぐ機嫌がよくなる。

悪く言えば単純なんだよね。

そんな彼がかわいいんだけど。

「おい、もう、やめろって公衆の面前で、はずかしいだろ〜。そんなんじゃ、ごまかされないぞ。」

そうは言いながらも、彼は思った通りうれしがっていた。

それを見て私はまた笑ってしまった。

好きという気持ちを実感できる瞬間でもあった。

そんな彼に何度、すくわれただろうか・

私たちはどこにでもいるごく普通のカップルだった。

たまにだけ私の買い物に愚痴をたれながらもつきあってくれたし、彼が好きなゲームセンターにいくと、私のためといいつつ、自分が楽しみたいだけだろうけど、どうでもいいようなぬいぐるみをとってくれたりもした。

私が見たいといった映画を観に街の映画館にいったら決まって、仲良く2人でわけようといいながらポップコーンとコーラを1つずつ買った。

結局はポップコーンは大半、彼の口の中にすいこまれるが、映画に夢中になっている彼の横顔が好きだった。

映画を観終わると近くのカフェでお互いの感想を言い合い、たまにお互いの解釈の違いから口論になったりもした。

きりがないので、最後は私がビデオがでたらまた見ようね、ということでも少しづつ納得していた。

そしていつもと同じように彼の家にいき、心を重ねあった。

私は彼のとなりにいれるだけでよかった。

彼の胸の中で眠るのが好きだった。

この場所は誰にも渡したくないと思った。

別れ際には背を向いている彼に腕をまわし、体をよせた。

彼の背中をみていると切なくなってしまうからだ。

そんな私に彼は向き直ってやさしくキスをしてくれた。

私の気持ちには気付いていないだろうけど。

そのキスがとても好きだった。

彼のやわらかい気持ちが伝わってくるキスだった。

3章 約束

「プレゼントも用意してあるし。」

ショッピングモールでの買い物に付き合ってくれた彼は疲れたのか、早く帰ろうと言っていたけど、私はあの海が見たくて嫌がる彼をつれて、私たちは海にきていた。

そんなとき、クリスマスの話題を話していたら、彼の口から私の想定外の言葉が飛び出た。

「……ほんと?……うれしい……。」

クリスマスプレゼント?彼が?

正直驚いた。

彼が私のために考えてくれている。

たとえ、つい流れて言ってしまった言葉だとしても、私は素直にうれしかった。

「ねえ!イブの日は、またここにこようよ!この海を見にね!ねえ、いいでしょ?」

そっぴいながら私は彼の腕をとり抱きしめた。

するとなぜだか彼はちょっと顔が緩んだのがわかった。

「別にいいけど、海が見たいなら他のきれいな所、連れてってやるよ」

「やだ！この海がいいの。この海が好きなの。うまくいえないけど、この海は・・・やっぱり、秘密！」

「なんだよ？気になるだろ？おしえろよ」

「ダメー、ないですよ」

やっぱり彼はしらないらしい。

私が彼を好きになつたのはこの海だった。

彼がはじめて連れてきてくれた海。

多分、彼は私があるとき流した涙の意味はわからなかっただろうけど、彼なりに不器用ながらも私を元氣付けてくれた。

そんな彼がなぜだか、かわいく見え、心が安らぐのを感じた。

そのときから、この海はとても大切な場所になった。

それにしても初めてきた海ってことぐらい、覚えてないの？

しょうがないなあ。

彼が覚えていないのは少し不満だけど、私一人だけの甘い秘密みたいで、独り占めしてやろうと思った。

「なんだよ、ちえ、まあいいや」

彼は流したような返事をしたが、私にはそれはちょっとすねてるって、すぐにわかった。

それがかわいくて、私は左手で彼の右腕をぎゅっと握り締めた。

彼の左手は私が買った服をもっていたので、少し歩きにくそうな彼がちよっと愛しかった。

星を見るために座りやすい場所を探して歩いている彼の腕につかまりながら、あのときのことを思い出していた。

恋に落ちた日のことを。

4章 恋に落ちた夜

その日、私は悲しみに包まれていた。

やはり今日は一日、家で独りでいればよかった。

一人で思いっきり泣いていればよかった。

昨日、飼っていたネコが死んだのだ。

寿命であるコは死んだのだから、少しは救われるのだが、やはり悲しい。

しかも、私には前もってわかっていたことなのに。。。

涙は昨日でかれたと思ったのに、思い出すとまたあふれ出てくる。

悲しめで心が押しつぶされそうになる。

やはり、バイトを休めばよかった。

バイトどころではない。

バイトにいけば余計なことを考えずにいられると思ったが、やはりだめだった。

休憩に入っただけでたん気が緩んだのが、ためてた涙が一気にあふれてきた。

「ねえ、何で泣いているの？」

バイトとして入ってきたばかりの彼だった。

私はその声がするまで、休憩室に人が入ってきたのに気づかなかった。

いつも笑顔でいようと思い、無理をしても笑ってきた私が不覚にも泣き顔を人に見られてしまった。

しかし、涙をとめることはできなかった。

そんな私を見てたぶん彼はビックリしたのだろう。

「・・・今日も暑いね、仕事はだりーし、こんな日は海にでもいつて泳ぎたいよね」

彼が仕事以外のことを話し掛けてきたのだ。

いつもは、あまり感情を表に出さない、愛想のない人だと思っていた彼がだ。

そのギャップに私は気持ちがあたたかくなっていくのを覚えた。

「そうだね、海、いききたいよね、海・・・みたいなあ・・・」

そういった私の目にはもう涙はなかった。

不思議だった。

なぜだかは自分でもわからなかった。

「今日、このあと時間ある？」

「え？」

いきなりの彼の誘いに戸惑ったが、そういった彼の顔はいままでバイトではみたことのない少年のような無垢な表情だった。

不器用な彼の突然の言葉。

勢いで言ってしまったのを後悔したのだろう、彼は少年のような表情から、たちまち慌てたような顔をし、どこか罰がわるそうな顔をしていた。

なんかそれがおかしくって、私もつい勢いで彼の誘いに乗ってしまった。

バイトが終わると、彼は私を海に連れて行ってくれた。

その海は、人工の砂浜で、ゴミも目に付く、お世辞にも綺麗な海とはいえなかった。

けれど、その海が今の私にぴったりの場所のような気がして、心が穏やかになっていくのがわかった。

彼は私と常に一定な距離を置いていた。

1 m。

ちよつと手を伸ばせば届く距離。

近づくとそつと離れていく彼。

変な空間。

不器用な彼。

ぎこちない態度。

戸惑っている表情。

その彼と私の微妙な距離感が、変におかしくて、私はいつもの笑顔ではなく、心から笑ってしまった。

ふつと空をみあげると、下弦の月が私たちを見守ってくれていた。

5章 星に願いを

「まだかなあ、流れ星」

私はそういいながら彼の手をぎゅっと握り締めた。

たぶん彼はいやいやつきあってくれてるんだろう。

それもそうだよな。

流れ星なんかいつ流れるかわからないのに、待ってるなんてつらいし、なにより待つことが嫌いな彼にとっては苦痛なだけかもしれない。

だけど、もう少しだから。

あとちょっとで流れ星が流れるから、がんばって。

今年は暖冬のせいもあるのか、昼間は夏のような陽気だったけど、夜になるとやはり冬だということを感じさせた。

海風の影響もあるだろうがけど、冷たい風が冬だということを教えていた。

彼は今日出かける前に天気予報をみてきたのだろう。薄着で寒そうだ。

確かに天気予報では今日はいちにち過ごしやすい暖かい日となるでしょうといった。

彼はそれを信じてしまったみたいだ。

なんかちょっとかわいく思えた。

寒そうに体を小さくしている彼に私はバックから魔法瓶をとりだしコップにあたたかいココアを注いだ。

それを彼にわたすと黙ってココアを飲んだ。

暖かいものを用意してたなんて、不思議に思っかな？

まあ、このくらいじゃバレないだろうけど。

私は昼間かったマフラーを袋から取り出し、彼にそれをかけてあげた。

「ありがとう」

それは小さな声だったけど、やさしさに満ち溢れてた声だった。

その恥ずかしそうな彼をみて私はキスをした。

そろそろ流れ星がながれる時間だ。

彼は私の突然のキスに驚いてか、私をみている。

このままだと見逃しちゃうだろう。

でも教えてあげない。

いたずら心にそうおもっちゃった。

ほら、もうすぐ、もうすぐ。

「あ！流れ星！」

漆黒の空を一筋の光が切り裂いた。

それはとても眩い光を放ち、右から左へとかけていった。

とても大きな、そして綺麗な流れ星だった。

私は星に願いをかけた。

《彼とずっとずっと一緒にいられますように》

ふっと、横の彼をみると、私の声に反応してか空をみあげキョロキョロしている。

「みたみた？」

私は彼が見逃したとわかっていた。

ただどあえて聞いた。

見逃した理由が私の顔を見てだと知っていたから、ついついたずらっぽく聞いてしまった。

「私はすっかりみたもねえ。願い事もバツチリ！」

「何をお願いしたんだ？」

彼はちょっと悔しそうな声で私にきいてきた。

隠してるつもりだろうけど。

「へへへ、ひ・み・つ！」

そういうと彼は不機嫌そうな態度で、「ふん、じゃあ、きかねよ。」と喋ってきた。

ふてくされてる。

たぶん私に甘えてきてほしいんだろう。

だからわざとそーゆー強がりを見せてるんだ。

もう下手な演技。

ばれだつて。

しょうがないなあ。

そんな彼の態度がなんだかわいくなって私は彼の腕を強く抱きしめた。

ずっとこのままでいたい。

このまま時間が止まればいいのに。

これからもこの人と同じ時間を過ごしていきたい。

10年後も50年後も・・・。

素直にそう思った。

そのときだった。

目の前がまぶしい光に包まれたかとおもつと、私の身体は宙を浮いているようにフワフワし、急にその光にあたりの景色とともに吸い込まれたと思うと、真っ白い部屋に一人私は立っていた。

そしてぼんやりとあたりが見え始めた。

いつもとおなじように。

ビデオテープを再生してるようにその映像は流れてくる。

赤と緑のイルミネーションで飾られてる街。

いつも私たちがまちあわせに使っている街頭だった。

そこに私が立っている。

今日買った新しいコートを着ている。

たぶん彼を待っているのだろう。

だけどその表情はどこかさびしげにみえた。

街頭テレビでは天気予報がやっていて今日はホワイトクリスマスになるといっている。

クリスマスに雪かぁ。

私は久しぶりにたのしみな、期待感をもつ未来をみることができた。ちよつと私の表情がいつもと違うのが気になるけど・・・。

そう、私には未来がみえるのだ。

「なぁ、どうした？おいつてば。」

彼の声で私は現実へと引き戻された。

「おい、どうした？ぼーとしちゃって」

「ん・・・なんでもない。海をみてただけだよ。」

「ふーん。ならいいけどさ。」

「あーあさってさぁ、雪、降らないかなぁ。イブの日に。イブの日に雪ってロマンチックだよねぇ、なんか絶対、雪降るような気がする」

る」

「降らないって。天気予報では晴れだっていったぞ。それに東京ではホワイトクリスマスなんてまずありえないよ。あんなのドラマの中だけさ。たしかここ100年間で1回しかなかったはずだよ。降ったら奇跡だって。」

「そうだとしても、降るよ、絶対ね。」

クリスマスに雪は降るのに。

あたったらびつくりするかなあ、彼は。

私のみた未来はいままで100%そのとおりになってきた。

よいことも、悪いことも。

未来は変えることができないのだ。

「ねえ、今年のクリスマスだけでなく、この先も、来年も再来年もずーっと、ずーっとクリスマスは一緒にここに来ようね！約束ね！」

「えー、やだよ、めんどくせーなあ。だいたい先のことなんかわかんねーだろ？そんな先の約束したって意味無いよ。」

彼はココアを一気に飲み干して空になったコップを私に渡した。

それを受け取るうとした瞬間だった、また、あの感覚に襲われた。

また映像が私の頭のなかに流れ込んできた。

それは今までみてきた中で一番最悪な未来だった。

とても残酷な未来。

なぜ？

なんでなの？

わたしは心の中で何回もそう叫んだ。

なんでこんな未来が・・・。

どうしてなの？

神様・・・残酷すぎるよ・・・。

「え、ちょ、なんでないてるの？」

彼の戸惑ってる声がかすかに私の耳に入ってきた。

「おい、どうした？どうしたんだよ？」

私は彼の問いかけに答えることができなかった。

「・・・ごめん、」

「なに、どうたんだよ？」

「ごめん、なんでもない、なんでもないの。ごめん、ごめんね、」

そっいいながら、私は彼を強く強く抱きしめた。

彼を放したくない。

その思いで頭がいっぱいだった。

涙が次から次へと流れ出し、彼の服を濡らしていた。

6章 未来

私には未来がわかる。

未来がみえてしまうのだ。

小さいときからそうだった。

皆もあたりまえのように見えているものだと思っていた。

それが私だけだとわかった。

私だけが特別だった。

私は私が怖くなった。

病気だと本気で思い、幼い私は未来が見えるたびに泣き叫んでいた。

どんなに普通というのがうらやましかっただろう。

人は未来がわかったほうがうらやましいとおもつかもしいが、
いいことなんかひとつも無い。

未来がわかるってことは、楽しいことが半減するということ。

悦びが減っちゃうんだ。

驚きもないし。

そのくせ悲しい未来は、より悲しくなる。

悲しむ時間が長くなるのだ。

悲しみは前もってわかっていても悲しい。

薄れることはない。

そして、その悲しい未来を変えることもできない。

いままでどんなにチャレンジしてきたか。

悲しい未来を変えようと必死にもがいたが、結局はそのとおりになるのだ。

未来は変えられない。

変えることが出来ない。

ただ黙ってその時を待つしかないのだ。

どんなに悲しいことが待ち受けているとしても。

子供の頃、未来がわかる私は、小学校でちょっとした有名人だった。

見えたことを友達に話してしまったからだ。

それが全体的中してしまった、いいことも悪いことも。

そんな出来事から、私はいじめにあった。

悪いことが当たればおまえがやったんだとか、おまえのせいだとか、言われたし、白い目でみられたりもした。

それからは決して人に自分の力を言わないと誓った。

いままで、悲しみや、それを回避する術もない自分の不甲斐なさ、そして絶望に一人で耐えてきたことか。

祖父が死ぬのなんて5年もまえからわかっていた。

当時まだ元気だった祖父に、未来がわかっていた私はどう接しているのかわからなく苦悩した。

祖母のときは1週間前にわかった。

1週間涙を流しつづけた。

なんて声をかけたらいいのかわからなかった。

言ったところで、未来はかわらないのだから。

いつもいつも未来がみえるわけではなく、ランダムなのだ。

5年後の未来だったり、1ヶ月後の未来だったり。

場所も、人も、時も、どんなことかもすべて突然私の頭の中に映像として飛び込んでくる。

あのときも私は未来をみた。

あの流れ星をみたあと、そう見てしまったのだ。

1日に2回未来をみたことなどいままでなかった。

1回目はクリスマスが雪になるということ。

そして2回目は・・・。

確かにあれは彼だった。

どんなにこれが見間違いならいいと思ったことが。

これほど自分の力をうらんだことはない。

これほど自分の無力さ、不甲斐なさを痛感したことはない。

私は見てしまった。

一番みたくないものを。

彼の死を・・・。

そこは病院だった。

いつもの様に、私の頭の中に突然入ってきた映像。

それは古いビデオテープを再生しているような感じで、所々ノイズが入っていたが、十分にわかる映像だった。

暗い感じの線香の匂いが立ち込める個室。

その個室の端っこのほうで声をだして泣いて座っている私がいた。

目は真っ赤になっていて腫れていた。

その私の視線の先には1つのベッドがある。

その上には誰かが横になっていた。

彼だった。

私は声にならない声をあげた。

なぜ？

なんでこんなものをみせるの？

私がなにかした？

なぜこんなことに・・・。

今までで一番つらい未来。

心底この力をうらんだ。

神様を恨んだ。

どうして私だけが。

涙がとまらなかった。

とめることが出来なかった。

ただただ涙があふれてきた。

となりにいる彼が、いま、私のとなりに座っている彼が、死ぬ・・・。

たまらず私は彼を抱きしめてしまった。

強く強く、離さないようにと。

大好きな彼が死ぬ・・・。

残酷な未来。

さつき星に願いをかけたばかりなのに・・・。

なんでこんなことに・・・。

7章 溢れる想い

私はいつのまにか映画みたあとにきているカフェにいた。

たぶん彼が泣いている私をなだめながらここまで連れてきたのだろう。

あまり覚えていない。

ずっと考え事をしていたから。

彼がレモンティーとコーヒーをオーダーしたあとは、お互いしばらくくだまつたままだった。

「さっきはごめんね、突然ないちゃったりして。」

私はとりあず、突然泣き出してしまったことを彼に謝った。

「あ、ああ、．．なんだったんだよ、．．なんで突然なきだしたんだ？　なんか気に障った？」

「ごめんね、さっきはちょっと感情が高ぶっちゃって、ほんとごめん、気にしないで。ね？」

「気になるよ。ちゃんとわけを言ってよ。」

「ちょっとね。なんでもないの。もう大丈夫だから。」

「なんだよ．．」

彼はどこかがっかりしたような声でいった。

彼に対して本当のことはいえない。

言うことができない。

私は彼に真実を話すことはできない。

どんなことがあっても。

「愛してる。」

私は、涙の本当のわけを言えない代わりに、心をこめてそういった。

「え？ な、なんだよ、突然。」

「うん、別に。だた、言いたくって。愛してるよ。」

「わ、わかったよ。まったく。突然泣き出したりわけわかんねえなあ」

彼はどこか照れたような、安心したような安堵の表情を浮かべていた。

私は、彼が好きだ。

彼を愛している。

それを痛いほど感じた。

どんなことがあっても彼を守りたい。

彼を失うなんてこと絶対に嫌だ。

彼は死ぬ運命にある。

そういう未来にある。

私がみた未来はどんなにもがきあがいても決して変える事の出来ない未来。

それはわかっている。

わかってるけど、どうにかして彼を救いたい。

どうすればいいのか？

ずっとそればかり考えていた。

助かる方法を。

きつと希望はあるはず。

未来はきつとかえることができるはず。

私を変えてみせる。

彼の未来を。

彼の運命を。

私にしか出来ないことだから。

私が彼を救う、そう決意した。

そのために私ができること。

それは彼を変えること。

彼の考え方、なにより命の大切さ、生への執着心、生きるということをもう一度あらためて考えてもらう必要があると思った。

彼は私といるときでさえ、どこか冷めた感じで世界を見ていた。

自分の人生なのにどこか投げやりで、全てにおいてドライだ。

私が彼にこの力のことを正直に話して、彼が死ぬ運命にあることをいったら、きっと彼は素直に受け止めてしまっただろう。

いや、その時点で、生きようとする意志を完全につしない、すぐにでも命を絶とうとするかもしれない。

きっと彼は生きるということに未練は感じないだろう。

そんなんじゃないダメだ。

生きて欲しい。

生きるということは素晴らしいことだと、感じて欲しい。

彼に生を満喫して欲しい。

彼に考え方をあらためてほしい。

ちがう視点で世界をみてほしい。

この世界には素晴らしいことで溢れているはずだから。

まだ彼はそれを知らないだけだから。

それを彼に教えたい。

そして、彼が死ぬと悲しむ人間がいるということを知ってもらいたい。

そのためにも、いままで以上に私は彼と向き合うことにした。

そう決意したのだ。

「ねえ、将来のこと、どうかんがえてるの？」

「え？」

「あなたは、いつもどこか悲しい目をしているの。なんで人を理解しようとしらないの？今はいいかもしれないけど、この先そんなんじゃないだよ。いろんな世界をしらなきゃ。そして、しっかり目標も作って、その目標のためにしっかりと自分の足であるいていかなきゃ」

や。ね？」

そう私が言ったのはこないだの事についての話しが一区切りがつき、彼がコーヒーをおかわりした後のことだった。

彼は突然の私の言葉に戸惑いを隠せないようだった。

その表情をみて私は失敗したと思った。もっと上手な聞き方があっただろうに。

彼は窓の外を見ながら、私が去年あげたジッポでタバコに火をつけた。

「どういうことだよ。」

しばらくして彼がいった。

「なにが良かったんだよ。なに？なんなんだ？お前は哀れnderのか？余計なお世話だ。」

その言葉には、怒りがこもっていた。

普段あまり感情を表に出さない彼がだ。

きつと彼の心の奥の傷を私が触ってしまったんだろう。

「ち、ちがうよ、私はただ・・・そうじゃなくて、あなたはいつも、人と距離を置いてきたでしょ？言いたいことも言わないで・・・だからせめて私には言ってほしいの、なにを考えて、何を思っているの

か、素直に言ってほしいの。」

私はあわてて弁解した。

彼に私の気持ちをわかってほしくて。

「お前に言われたくねーよ。だいたいおまえになにがわかるんだ？」

そっからはもう、彼は堰を切ったように言葉を感情とともにまくしたてた。

手がつけられなかった。

彼に誤解をさせてしまった。

気持ちをうまく言葉にできなかった。

そして、運命の日を迎えた。

世間では東京が40年ぶりのホワイトクリスマスになるかもと騒いでいた。

8章 過去と未来をつなぐ現在

クリスマスだというのにこの海は人が少なく、どこかさびしそうだった。

私たちはあの時、一緒に流れ星を探した場所と同じところに静かに腰をおろした。

どれほど時が経ったのだろうか、静けさがあたりを包みこんでいた。いろいろな考えが頭の中を駆け巡っていた。

「・・・久しぶりだね・・・、元気だった？」

長い沈黙を破り、私は不安からか普段ならたわいもない言葉をかすれた声でいった。

「うん、まあまあかな・・・」

彼は相変わらず流したような返事をした。

それがかえっていつもと同じようで、私は少し安堵した。

「そうだ！またココア持ってきたんだ、一緒に飲もうよ・・・」

私はあのときと同じようにココアをつくってきた。

あの時、流れ星を探したときと同じように。

なぜかあのときのことを思い出した。

彼の未来がみえる前のこと。

あの時までとても幸せだったのに。

あの時、星にかけた願いはかなわないの？

そう思うと涙が溢れ出していた。

涙が止まらなかった。

「なに泣いてるんだろね、私・・・」

彼が横目でみているのに気付き、私は涙を拭きながら、かすれた声でそういった。

「あなたにとって私ってなんなのかな・・・」

彼に言いたいことはたくさんあった。

だけど、それを言う勇気を私は持っていなかった。

彼をくるしめるだけなんじゃないか。

彼にとってわたしは重荷なだけなんじゃないか。

そういうネガティブな考えが浮かんでは消え浮かんでは消え、繰り返していた。

彼は、何も言わずに強く私を抱きしめた。

彼のぬくもりを感じながら、再度、この彼を死なすことだけはさせないと、強く思った。

そうだ、かんがえてみれば、あの未来の映像には私も写っていた。

彼が冷たく寝ている傍らに泣いている私がいた。

もし、わたしが今、彼と別れたらあそこには私はいないのではないか？

そうすれば、私が見たあの未来は、これから起こる本当の未来とは違くなる。

そうすれば、彼は死ななくても済むかもしれない。

未来が変わるかもしれない。

確信はないけれど、その可能性は十分にある。

だとしたら、彼のために、彼の未来のために私は彼の前から姿を消したほうがいいのではないか。

それが一番の方法なのではないか。

そう考えた。

そうだ。

それがいい。

それしかない。

愛する彼のために。

私が彼のために出来ること。

「もう、おわりにしよつか・・・」

私は涙を目にいばついに溜めてそういった。

やっと声にでた精一杯の言葉だった。

「・・・そうか、わかった。」

しばらくして彼が言った。

私を強く強く抱きながら。

私は背中に彼の大きな手を感じていた。

「・・・あ、雪・・・」

「・・・ほんとだ・・・」

やはり私がみた未来どおり、この日はホワイトクリスマスになった。

未来は変わらない。

変えるためには、これでいいのだ。

私の選択は間違っていない・・・そういいきかせていた。

天使の羽の様に舞い落ちる雪の白さと、どこまでも続いている海が二人を包んでいるような気がした。

私は涙が止まらなかった・・・。

第3部 1章 僕の答え

「ね？雪になったでしょ？」

どのくらいの時間がたったのだろうか、僕はいつまでも彼女の温もりを腕の中で感じていたかったが、その願いも虚しく、彼女は僕の腕の中をすり抜けてそう言った。

目を潤ませていたが、その表情はやさしい顔をしていた。

「うん。」

僕はそう返事をするしかできなかった。

「来年もいっしょにクリスマスをすごしたかったなあ」

僕はその言葉に心を殴られたように、鼓動が早くなったのを感じた。

「ごめんね、約束やぶっちゃって。」

彼女はいたずらっぽい笑顔でいった。

しかし、その表情がどこか切なそうで、悲しみに満ちているのがわかった。

約束守れないのは僕のせいなのに。

僕は、涙しかでなかった。

「さよならは言わないよ。悲しくなるから。」

彼女の目にはまた涙が溜まっていた。

「いままでありがとうね。たくさんのいい思い出をありがとう。」

最後まで何も言えない自分が情けなかった。

「じゃ。またね。」

彼女はそういつて、笑顔をみせていた。

しかしその笑顔はいつもと違って、一筋の涙がほほをつたっていた。

そして、彼女は僕の前から去っていった。

人がまばらの砂浜を横切りながら、一度も振り返ることもなく・・・。

僕は彼女の後姿をただ眺めていた。

これが夢でありますようにと淡い期待をいだきながら。

そして、彼女の姿が僕の視界から完全に消えた。

僕は一人残されたこの人工の砂浜で降り続いている雪の冷たさを感じていた。

彼女が去って、彼女を失って、初めて彼女の大切さに気がついた。

いつのまにか僕の中でこんなにも彼女の存在が大きくなっていたなんて・・。

彼女を失いたくない。

本気でそう思った。

気がついたら僕は走り出していた。

砂に足をとられながらも、彼女の足跡を必死で追った。

もう、いまさら遅いかもしれないけれど、僕の本当の気持ちを彼女に伝えたい。

その想いだけで僕の身体は動いていた。

僕は砂浜を抜け、ビーチのすぐ隣にある駐車場を駆け抜け、歩道に出た。

そこで彼女の姿を見つけた。

「ちょ、ちょっとまってよ！」

「おい！まって！」

僕は息をきらしながら、車道を挟んで向こう側に居る彼女を呼び止めた。

二人の間には赤信号が邪魔をしている。

彼女は僕の声に気づいたのか、驚いた顔でこっちを振り向いた。

僕は横断歩道の端で息を整えながら、想いを全てぶつけようと、話し出した。

「ごめん！」

僕は道路の向こう側にいる彼女にすっかり聞こえるような大きな声で言った。

「いまさらかもしれないけど、僕は、僕は、きみが好きだ！僕にとつて君は大切な人だって気付いたんだ。君といるといままで経験したことない気持ちになれた。はじめて人を真剣に好きになれたんだ。はじめて、心から言えるよ、愛してるって。君を愛してる！」

僕は思うまま口にした。

考えるよりも先に言葉がでてきた。

それはかつこよくはないと思うけど、僕の本当の気持ちだった。

彼女は泣いていた。

僕はただ泣いているだけの彼女を抱きしめたいと、はやる気持ちを抑えられず、彼女の元にかけだそうとした。

「こないでええ！」

そう彼女は叫んだ。

泣きながら。

「こっちにこないでえ！」

そう叫ぶ彼女の言葉を無視し、僕は彼女を抱きしめるべく駆け出した。

そのときだった。

僕の体はまぶしい光で包まれた、と、同時にクラクションが鳴り響いた。

驚いて僕は足が止まった。

車が僕に向かって突っ込んできていた。

あたりには車のブレーキ音が響いた。

つぎの瞬間、僕はドンと押され地面に倒れた。

しかし、車に惹かれたにしては痛くない。

僕は、あたりをゆっくりと見回した。

車のブレーキ跡、アスファルトとタイヤが焼ける臭い、斜めに停まっている車、その車のライトが照らす白い雪、

そして、倒れている彼女・・。

そうだ、ぶつかると思った刹那、彼女は僕を突き飛ばしたのだ。

そして僕は助かり、彼女は、僕の身代わりに！！

そんな！

なんてことだ！

なんてことになってしまったんだ！

僕はすぐに倒れている彼女に駆け寄った。

「おい！おい！！大丈夫か？おい！なんで・・なんでだよ・・おい！返事しろって！誰か！！誰か救急車！！救急車呼んでください！！」

僕は彼女を抱え起こし体をゆすった。

さっきまで涙の通り道だった頬は、今は赤く染まっている。

何で僕のために・・・。

何で僕なんかを助けたんだ・・・。

なんで・・・。

僕は泣いていた。

僕の涙が、彼女の頬を伝ってアスファルトにおちていく。

「なんでだよ、僕を、なんで助けたんだよ、、、。なんで、
」

彼女は、ゆっくりと目をあけた。

「おい、きこえるか？すぐに救急車がくるからな？大丈夫、たいしたことはないから、な？」

彼女はうつろな目線の先に僕を捕らえると、にっこりと微笑んだ。

「よ、よかったあ。あなたは無事なのね？」

彼女の声は弱弱しかった。

「あ、ああ、僕はなんともない。君のおかげだ。」

その彼女の声を聞いて、僕は涙声でそういった。

「なんで、なんで僕を助けたんだよ。なんで・・・ぼくなんかを。」

「・・・な・・・なにいつてんのよ・・・あたりまえじゃない・・・そんなの・・・だって・・・」

あなたを・・・愛してるんだもの・・・」

そういつて彼女は弱弱い小さな手を震わせながら、僕の頬を流れる涙をやさしく、いや、力なくぬぐった。

そして僕に笑顔を見せたかと思つた次の瞬間、彼女はゆっくりと瞳を閉じた。

それと同時に小さな手も僕から離れていった。

「え・・・うそだろ？やめろよ、へんな冗談は・・・。おいつてば、目、あけるよ、おい！」

わらえねえつて、目あけるよ、おい！・・・そんな・・・だれか！！だれかあ！！！！」

真つ白な雪が降り注ぐ聖なる夜に、僕の声がかなしく響いていた・・・。

2章 私の答え

「ね？雪になったでしょ？」

どのくらいの時間がたったのだろうか、

私はいつまでも彼の腕のなかにいたかったが、意を決して彼の腕の中から離れ、そう言った。

「・・・うん。」

そういった彼の目には光るものが溢れていた。

泣いている。

顔をぐちゃぐちゃにして。

それをみて私はまた抱きしめなくなった。

だけどダメ。

そういいきかせて、自分を押し殺すように「冗談まじりにきこえるように言葉を続けた。

「来年もいっしょにクリスマスをすごしたかったなあ」

精一杯のやせがまん。

涙を必死にこらえた。

泣かないように楽しいことを考えようとした。

だけど、浮かんでくるのは彼との思い出ばかり。

「ごめんね、約束やぶっちゃって。」

私は笑顔でいようとしたが、涙が耐え切れず、またながれだした。

彼も泣いていた。

ダメだ、これ以上彼の顔をみれない、みたら決意が揺るぎそうだ。

「さよならは言わないよ。悲しくなるから。」

さよならは言いたくなかった。

いったらもう、本当に一生あえなくなる、そう思ったから。

「いままでありがとうね。たくさんのいい思い出をありがとう。」

自分でも声が震えているのはわかった。

でも、しっかりいわなくちゃ。

「じゃ。またね。」

私はそういつて、彼から離れ、歩き出した。

涙が次から次へと溢れ出した。

つらい。

本当につらい。

彼のこと好きなのに。

本当は今からでも引き返して彼に抱きつきたい。

あいしてるって言いたい。

だけど、それはできない。

彼の為に、彼の未来のために。

私の一番の幸せは、彼が幸せに生きていくことだから。

そう思って、振り返らないようにした。

これでいいんだ。

これで彼の未来は変わる。

彼は死ななくてすむ。

白く降り続く雪は、まるで私を慰めてくれてるように思えた。

「ちょ、ちょっとまってよ!」

やばい、彼の声が聞こえるよ、幻聴だよ、やっぱり、私はそんなに
彼が好きなんだ。

「おい！まてつて！」

？

幻聴じゃない。

今度ははっきりと聞こえた。

彼の声だ。

私はビクリして後ろを振り返った。

私はいつのまにか横断歩道を渡っていて、その車道の向こう側に、
彼がいた。

彼が私を追いかけてくれた。

「ごめん！」

彼は大きな声でそう言った。

謝ってきた。

なんであやまるの？

私は、もう一度彼の姿をみる事が出来るなんて思ってたし、ましてや追いかけてきてくれるなんて思いもしなかったから、すごい驚いたし、すごいうれしかった。

私の涙は悲しみの涙から、嬉し涙に変わった。

「いまさらかもしれないけど、僕は、僕は、きみが好きだ！僕にとって君は大切な人だって気付いたんだ。君といるといままで経験したことない気持ちになれた。はじめて人を真剣に好きになれたんだ。はじめて、心から言えるよ、愛してるって。君を愛してる！」

うれしい。

そんな風に思ってくれてるなんて。

すごくうれしい。

私は、彼を想う気持ちをもう抑えることが出来なかった。

今すぐ彼に抱きつきたい。

そうおもった。

しかしその刹那、また突然、頭に映像が飛び込んできた。

未来だ。

でも、この映像は・・・そう、何回も見たことがある。

そうだ、夢でみるあの場面だ！

あのいつもの夢だ！

なんで！？

いや、今回は、顔が見える、いつもぼやけてみえなかったのに。

あれは・・・！！

私だ！！

私が立っている！

そして、向こう側にいる男性は・・・彼だ！

彼がいる！！

あの、夢にでてくる男女は、私たちだったのだ！

私はすべて理解できた。

あの夢は私たちの未来だった！

ということは、彼の死は・・・事故だったんだ・・・それも、今！

今この場面だ！このすぐあとに！！

なんということだ！

彼と別れても、結局そのとおりの未来になってたなんて！

彼は、私にかけよるべく、走り出そうとしていた。

ダメ！！！！

「こないでええ！」

こっちに来てはいけない！！

そのとき、猛スピードでこっちに突っ込んでくる車が見えた。

このままでは私が見た未来どおりになってしまう！！

彼は死んでしまう！！

「こっちにこないでえ！！！！」

必死にそう叫んだ。

彼は私の制止を聞かず、赤信号を駆け出した。

もうだめ！！

彼の体は車のヘッドライトに包まれていった。

彼の足がとまった。

轢かれる！

彼が死んじゃう！！

い、嫌ああ！！！！！！

・
・
・

・
・
・

遠くで彼の声が聞こえた。

顔に水滴が当たった気がした。

目をあけると、そこには彼がいた。

泣いている彼が。

「おい、きこえるか？すぐに救急車がくるからな？大丈夫、たいしたことはないから、な？」

そういつている彼の声は小さく聞き取りにくかった。

なんでわたしは寝てるのかな？

そうだ、私は、あの瞬間、体が自然に動いて・・・

彼をたすけようと必死で・・・

そっか、そうだ、彼をつきとばしたんだ。

無我夢中であんまりおぼえてないや・・・

頭もボーっとしてるし・・・。

でも、よかったあ・・・彼・・・助かったみたい・・・。

「よ、よかったあ。あなたは無事なのね？」

なんか言葉がうまくでなかったけど、彼が生きているのがうれしかった。。

「あ、ああ、僕はなんともない。君のおかげだ。」

「なんで、なんで僕を助けたんだよ。なんで・・・ぼくなんかを。」
そういつた彼は子供みたいに泣いていた。

「・・・な・・・なにいつてんのよ・・・あたりまえじゃない・・・そんなの・・・だって・・・愛してるんだもの・・・」

本当によかった・・・。

彼は死なずにすんだんだ・・・。

私は・・・彼を守れたんだ・・・。

私は・・・彼の・・・未来を変えたんだ・・・。

大好きな彼を・・・私は・・・。

私は安堵からか、急に眠くなってしまった・・・。

体に力がはいらなくなるのを感じた・・・。

もう、何も見えない・・・。

何も聞こえない・・・。

わかるのは・私を抱いている、彼の温もりだけ・・。

最終章 ココア

僕は過去への旅を終え、再び現在に戻ってきた。

いや、彼女が僕にくれた【未来】に。

気が付けば周りにいた何組かのカップルは、今はすっかりいなく、辺りは静寂に包まれ、海岸に押し寄せる波の音しか聞こえなくなっていた。

僕は冬の寒い風を浴びながら、ただっ広い浜辺に腰を落とした。

真っ黒な天球に星を探しながら見つめていると、不思議と自分もその闇の中の一部になったような気がした。

それは決して、恐れとかではなく、むしろ安心感に包まれていくような感じだった。

僕はその無限に広がる闇の中に落ちて、あの時、彼女が星にかけた願いがなんだったのか、わかったような気がした。涙が自然と溢れ出した。

星たちは突然、フィルターをかけたようにぼんやりと輝いていた。

空が滲んで見え、よくわからなかったが、しかし確かに僕はこのときとても長い尾を引いた流れ星をみた。

僕はその流れ星に願いをかけた。

あのかかけられなかった願いを・・・。

空に瞬く星達が尾を引いて一斉に流れ出した。

夜空を切って走る星達はあまりに鋭く、まるで夢の世界に迷い込んだように美しかった。

僕はどこからか砂浜を歩く音に気が付き、人が近づいてくる気配を感じた。

その足音は僕の真後ろでとまった。

「わっ」

突然、うしろから少し小さな手が僕の身体を包んだ。

「やっぱりここだったね。」

それは彼女だった。

あのころと変わらない笑顔を僕に見せれていた。

「もう、なにしてるのー？」

僕は彼女の手をとりぬくもりを感じた。

「もう、こんなにつめたくなっちゃてえ、しょうがないなあ」

彼女はそういうと、バックから魔法瓶を取り出し、あったかいココアを僕に注いでくれた。

それを受け取って僕はゆっくりと口にした。

優しい気持ちになっていった。

「ごめんな、僕がわるかった。」

「あはは、もういって。私もわるかったし、ね、もう仲直りね。」

そういつて彼女は僕にやさしくキスをした

。そのキスは僕に安らぎを与えてくれた。

今度は僕から彼女にキスをした。

長くやさしいキスを。

「それにしてもさあ、普通、家をとびだすかなあ？びっくりしちやったよ、もう。」

「いやあ、ごめん、なんかつい。ごめんな。」

「いいけどね。どうせここにきてるんだろっなって思ったから。」

「そっか。」

「さ、早く帰ってケーキだべよ？もう、おなかすいちゃったよ」

「夕飯ちゃんと食ってたじゃんか。」

「えへへ、ケーキは別バラなの」

「ふん、まあ、いいけどさあ、・・・あのさ、ひとつ聞いていい？」

「なあに？」

「あのさ、前から聞きたかったんだけど、なんでいつもココア持ってるの？魔法瓶って・・・普通もちあるかねーだろ？」

「うそ？そう？？もう！いいじゃない、そんなこと。はやくかえろっ」

そういつて笑顔で彼女は僕の腕をつかんだ。

僕は彼女にせかされ、この海をあとにした。

彼女の温もりを腕に、そして肌には海風を感じながら・・・

終わり。。。

最終章 ココア（後書き）

ヘタですいません。これが処女作です。表現力がまるでないですが、読んでくださった方、なんでもいいんでコメントくださいwおねがいします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336c/>

雪月花

2010年10月20日18時49分発行